

書 評 と 紹 介

村上 潔著

『主婦と労働のもつれ』

—その争点と運動—

評者：堅田香緒里

その幻惑的なタイトル『主婦と労働のもつれ』に象徴されているように、ともすると時代錯誤とのそしりを免れかねない「主婦」という主題を、ともするとそれと背反するものとみなされる「労働」の問題との関わりにおいて捉えようというのが本書の狙いである。著者の村上は、主婦をめぐる問題について、「労働問題だけではなく、お金の問題だけでなく、意識の問題だけでもない（…中略…）とても複雑で、やっかいで、収まりのつかない、すっきりしない問題」であるという。そのうえで、本書全体を通して、「主婦」をめぐる「すっきりしない問題」ないし「もつれ」を、そのもつれるがままに描写し、「主婦」という女の生のあり様が持ち得る／持ち得た含意を示そうとしている。後述するように、著者のこのような姿勢にこそ、本書の際立った独自性と意義が表れている。

主婦をめぐるのはこれまでも様々な立場・文脈における議論が蓄積されてきた。しかし多くの場合、「すっきりしない部分」や「もつれ」というのは見過ごされ、切り捨てられてきた。著者が「もつれ」に着目するのは、そこで見落

とされてきたものを拾い上げ、その意味を考えるためでもある。このため、本書では戦後日本の主婦をめぐる複数の議論・思想・運動—より正確には、それらが見落としてきたもの—が改めて検討されることになる。非常に射程の広いその議論をここでくまなく紹介することは不可能だが、以下、駆け足で本書の内容を概観しよう。

第一章では、高度経済成長期前後の主婦をめぐる代表的論争である「主婦論争」が取り上げられる。村上は、論争に関わった論者の立場を「職場進出論」（Ⅰ）、「主婦天職論」（Ⅱ）、「運動主体論」（Ⅲ）、「構造的貧困論」（Ⅳ）の4つに類型化し、争点を再整理している。その整理に従うと、論争の中心は、主婦が職場進出を通して自立し、男との対等な地位を志向するⅠと、これに対抗して登場した「主婦役割」を再評価しようとするⅡとの間での、「働くべきか、否か」をめぐる対立軸にあった。それはさらに、主婦の立場—賃労働に従事しなくてもよい立場—を活かして担われる社会運動や市民運動を擁護する立場Ⅲによって補われ、これら3つの立場が論争の主要な位置を占めていた。そして、これらに対し、いずれの立場も家庭や職場における性差別構造そのものを問題化し損ねている点を問い、そうした構造の根本的解決を志向する立場として、改めてⅣが位置付けられる。

このような再整理を通して村上は、とりわけⅣの議論を援用する形で、主婦論争の（潜在化していた）課題を見出す。従来、主婦論争の最大の課題は「性別役割分業」批判の不在であるとされてきた。村上はこれに加えて、「経済的必要から働かざるをえない層」—Ⅳが重視する

構造的な問題の影響を最も強く受ける層一の問題が論争において見落とされてきたことを指摘する。従来論争では、「働く」か（Ⅰ）「働かない」か（Ⅱ）という対立構図が前面に出ていたが、他方で、「働く」女性の間の差異—Ⅰが志向する「（経済的に自立した）職業婦人」と、Ⅳが重視する「（家計のために）働かざるをえない主婦」との間の所得や階層の差—には光が当てられてこなかった。これに対し村上は、階層的な差異の観点からは、従来対立項とされていたⅠとⅡは、「働く」か「働かない」かを選べる階層という意味でむしろ条件的親和性を持つことを指摘する。そのうえで、それら（Ⅰ・Ⅱ）とⅣ＝働かざるをえない階層との間に、より大きな断絶があることを見出す。こうして、前者の「選択」を問題にする一方で、後者の置かれた「選択」の余地のない「現実」を見落としてきた、という主婦論争の新たな課題が析出されることになる。

第二章では、1960年代後半、高度経済成長によって一般化していく主婦のパートタイム労働を、代表的な女性労働問題研究者らがどのように評価していたのかが分析される。村上はそこに、パート就労は女の自己実現の可能性を秘めた新しい働き方であるという「擁護」と、むしろ全労働者の条件を悪化させうる被搾取的労働であるという「批判」とが混在していることを指摘する。

このように、従来の主婦をめぐる議論では、その在り様への「批判／擁護」あるいは「働く／働かない」の「選択」に集中し、そもそも主婦が置かれていた「現実」や「状況」はあまり顧みられてこなかった。

こうした予備的考察を経て、村上は、従来の議論の中で捨象されてきた当事者の「現実」や「状況」、そこに存在する「もつれ」を理解するために、第三章以降では当の主婦自身の手によ

ってなされた幾つかの模索に光を当てていく。まず第三章では、1970年代前半に、国立市民館職員・伊藤雅子によって企画された市民大学セミナーの記録『主婦とおんな』が検討される。同企画では、主婦当事者自らの日々の生活・状況分析を出発点とした討論が行われ、その過程で「主婦的状况」という概念が産み落とされる。「主婦的状况」の「克服」というよりはむしろ、そこにとどまりその意味を追求するこうした試みを、従来の女性解放論において切り捨てられてきた主婦をめぐる問題の「もつれ」を理解する鍵として村上は評価する。そこで続く第四章では、「主婦的状况」という概念を武器に活動した〈主婦戦線〉の思想と運動が総合的に整理される。

〈主婦戦線〉とは、国沢静子を中心とし、東京・東村山市を拠点として「主婦」かつ「リブ」の女たちによって1975年に結成されたネットワークである。当時のリブを中心とする女性運動においては、「主婦」は女性解放の過程で克服されるべき対象であり、その意味で外部化された存在であった。これに対し〈主婦戦線〉は、「リブ」という立場にありながら、一貫して「主婦」という自己／総体規定にこだわった。すべての女は「主婦性」規定によって「主婦的状况」に置かれているのだから、その状況をこそ女解放の基点としよう、と。彼女らはさらに、この「主婦的状况」という概念を媒介に、家庭責任を課された主婦の問題が、女総体の労働からの重層的疎外—パート労働や無償労働—に関連していることを指摘し、家庭のみならず労働における性差別構造をも批判していく。第五章では、その具体的実践として、〈主婦戦線〉を母体として発足し、1978年～90年代まで活動した〈主婦の立場から女解放を考える会〉及び〈パート・未組織労働者連絡会〉の思想・運動が再整理される。そこでは、パート主婦の多く

が自らを労働者ではなく主婦と規定してしまうがゆえに生じる「主婦的状况」の再生産構造が問題化される。

これらの運動を通して彼女らは、主婦が賃労働に飛び込もうが（Ⅰ）、主婦業を再評価しようが（Ⅱ）、あるいは社会運動に身を投じようが（Ⅲ）、根本的な解決にはならないことを示し、既存の女性解放思想の欺瞞性を訴えた。そして、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲいずれの立場にもみられる「専業主婦＝恵まれた存在」という前提そのものを問い、その階級性・性差別性において専業主婦もまた抑圧された存在＝「主婦的状况」が貫徹された状態であると論じ、Ⅳの立場を先鋭化させている。村上はこれを、「低階層の『主婦』、低収入・低待遇の『労働者』という、戦後日本において恒常的に女性のなかで大きな割合を占めている（にもかかわらずその存在がクローズアップされることのない）層の、その時点での生や労働に基軸を置いた運動」と高く評価する。それはまた、主婦の置かれた「状況」そのものに重きを置かない当時のリブ運動に対する批判的・反省の意味を持っており、この意味で女性解放運動全体にとっての重要性も指摘できよう。

第六章では、Ⅳの主婦とはその階層がややずれるⅢの立場の試みとして「ワーカーズ・コレクティブ」が検討される。家事に支障のない範囲で働ける主婦の労働形態として模索されたそれは、賃労働による自立とは異なる、地域に根差した新しい「主婦」の自立を志向していた。しかしそれは他方で、夫の稼得への依存と、夫を支える家庭役割をその前提にしており、皮肉にもこれらの維持・強化に貢献してきた。ともあれ、このように従来その主体は主婦であったのに対し、近年は雇用状況の悪化に伴い、主婦以外のイレギュラーな労働力（予備軍）にも射程が拡げられるようになり、ワーカーズ・コレ

クティブはその「雇用の受け皿」へと変容しつつある。村上はしかし、男性中心的な企業社会への対抗という観点からみると、これをたんにポジティブな発展として捉えることはできないと警鐘を鳴らす。主婦の手になるこうした試みの換骨奪胎を防ぐには、男性中心的な性差別構造そのものを問うようなⅣの立場による思想・運動によって補われる必要があるだろう。

ここまで整理したように、本書は戦後日本の主婦をめぐる複数の議論・思想・運動、とりわけそれらが見落としてきたものや「もつれ」を再検討したものである。以下では、こうした本書に備わる魅力と意義、評者の関心に基づいた若干の論点を示して稿を閉じたい。

本書の魅力は何よりもまず、その面白さにある。学問的価値もさることながら、本書がもつ「面白さ」をできるだけ伝えられればと考えたが、それは評者には不可能であった。というのも本書の魅力は、それが取り扱っている素材—とりわけ〈主婦戦線〉のその際立った独自性・ひりひりするほど徹底した日常生活に根差したラディカルさ—の魅力に加えて、その魅力をできるだけあるがままに、素材のままに—「もつれ」をもつれるがままに—綴る村上の姿勢・表現方法にも多く依っているからである。読者にはぜひこうした村上の表現そのものも楽しんでもらいたい。

そして本書の意義として三点挙げておきたい。第一に、〈主婦戦線〉という従来の主婦をめぐる議論においては見落とされ／軽視されてきた、けれども非常に独創的でクリティカルな主婦当事者による運動を体系的に紹介している点であろう。本書はほとんど唯一の〈主婦戦線〉に関するまとまった研究であり、従来の主婦をめぐる「外在的」な議論に対し、高度な状況分析を伴う主婦当事者による思想・運動が確かに

存在していたことを私たちに知らせてくれる。

とはいえ、第二に、それは単なる〈主婦戦線〉の紹介にとどまらず、彼女らの試みが先駆的に提出した視点を手掛かりに、「主婦論争」をめぐる従来の解釈を再考し、そのうえで新たな対抗軸を析出し、論争の別の読み方を拓いている点を挙げることができよう。これは広義の女性解放運動・論の歴史にとっても、非常に重要な点である。これまで「主婦」は、様々な批判や擁護に晒されながらも、「克服対象」とみなされるが多かった。しかし本書で光が当てられたような、女性解放運動の「大文字の歴史」には書きこまれることの少なかった主婦当事者の手になる思想・運動が提出してきた視点に出会ってしまったわれわれは、もはや主婦という存在をたんなる克服課題とみなすことはできない。とりわけ「働かざるをえない」主婦たちから生まれた思想・運動が、リブを始めとする女性解放思想と微妙な距離を持っていたことは重要である。村上はこのズレの中に主婦をめぐる問題の「もつれ」を見出し、「主婦的状况」という重要な概念を再発見した。本書を手にした者は皆、この「主婦的状况」という概念が提出する新たな課題に向き合わざるを得ないし、女性解放運動の歴史も書き換えられなければならないだろう。

第三に、この「主婦的状况」概念に関連して、本書のもつ現代的意義を強調しておきたい。戦後日本、とりわけ高度経済成長前後の主婦をめぐる問題に焦点化している本著だが、ここで提示された視点は、今日の日本社会においても大きな示唆を持ちうる。というのも、今日では、非正規雇用やケアワークが男性労働者にまで浸透し、労働の場におけるいわば「主婦的状况」

が高度経済成長期以上に進行しているからである。この意味で、今日の非正規雇用をめぐる問題や運動を考える際、「主婦的状况」から出発する運動を模索し続けてきた〈主婦戦線〉の試みを振り返ることには大きな意味があるだろう。

最後に、本著に触発されて生まれた問いを示し、稿を閉じたい。本著で村上は、「働く」か「働かない」かを“選べる者”との対比で、そもそも“選べない者”すなわち「働かざるを得ない」低所得・低階層の女に光を当ててきた。他方で、もう一人の“選べない者”すなわち「働きたくても働けない」女の生や労働はどのように位置付けられるのだろうか。障害や病気、あるいは抜き差しならないケア責任等のためにむしろ家庭内にとどまらざるをえず、パート労働を始めとする家庭外での賃労働にアクセスできない者の声をどう拾いあげてゆくのか。「働く主婦」といっても、「(経済的に自立した)職業婦人」と「(家計のために)働かざるをえない主婦」とが異なっていたように、「働かない主婦」といっても「働く」選択肢も存在するうえで働かない者と、そもそもそうした選択肢が与えられない者とでは、その置かれた生の状況は異なるのではないだろうか。「主婦」をめぐる問題、あるいは「労働」をめぐる問題について考えるとき、本著が拓いてくれた新たな視点に加え、こうした「もう一人の女」の紡ぐ声が補われたい。

(村上潔著『主婦と労働のもつれ—その争点と運動』洛北出版、2012年4月、331頁、3,200円+税)

(かただ・かおり 埼玉県立大学社会福祉学科助教)